

P-24 九州歯科大学における教育力評価のための学生生活関連事項調査 および教育成果の検証

○豊野 孝^{1,6}、東 泉^{2,6}、吉野 賢一^{3,6}、片岡 真司^{1,6}、角館 直樹^{4,6}、
自見英治郎^{5,6}、日高 勝美^{2,6}

九歯大・¹解剖学、²応用薬理、³学際教育、⁴臨床疫学、⁵生化学、⁶大学自己評価部会

教育成果および教育実態の継続的な検証は、本学の教育力を評価していく上で必要であると考えられる。そこで本研究では、学生生活関連事項、および講義、実習、大学教育に対する満足度について、各年度毎にアンケート調査を行い、その解析を行った。

歯学部学生を対象とした無記名のマークシート方式による調査を、平成23～27年に行った。学生生活関連事項(学生相談、奨学制度、サークル活動)、および講義、実習、大学教育に対する満足度について、それぞれ5段階評価で調査を行い、その経年変化を調べた。

学生生活関連事項において、学生相談については、平成23～26年にかけて、満足群の割合の増加(21%から34%)が認められ、不満足群の割合の減少(42%から17%)が認められた。一方、奨学制度およびサークル活動については、平成23年度以降、満足群がそれぞれ約30%および40%前後で推移していることが認められた。講義、実習、大学教育の満足度については、平成23～26年度にかけて全項目において満足群の割合の増加が認められた。不満足群に関しては、全項目において平成23～25年度にかけてその割合の減少が認められた。

今回、奨学制度およびサークル活動において、一定の満足度が維持されていることが明らかになった。今後はこれらに事項に関して、満足度が上昇できるような改善点がないかを検討していく必要があると考えられた。大学教育の満足度について経年的な上昇が認められたが、今後も各種の教育関連事項について調査を行い、本学教育における問題点の把握に努めていく必要があると考えられた。

P-25 九州歯科大学の個別入試およびAO入試に関する入試実態調査

○豊野 孝

九歯大・解剖学

入試において、本学のアドミッションポリシーに沿った高い資質を有する人材を選抜していくためには、継続的な入試制度の改善が必要である。そのためには、現状の個別入試およびAO入試における入試実態、および問題点の把握が重要である。そこで、本研究では新入学生を対象として、本学入試に関するアンケート調査を行い、その結果の解析を行った。

平成25年度から28年度入学の歯学部1年生(歯学科、口腔保健学科)を対象として、無記名のマークシート方式による調査を行った。個別入試およびAO入試の難易度(易しい1～普通3～難しい5)について、5段階評価で調査を行った。さらに本学に入学した理由についても、選択肢形式の調査を行った。

個別入試の難易度の平均点は、歯学科では平成25年度では2.88から少しずつ低下し、平成28年度では2.51であった。口腔保健学科では平成25年度から平成28年度にかけて難易度3.5前後で増減が認められた。AO入試の難易度の平均点は、歯学科および口腔保健学科において平成25～28年度にかけて、それぞれ難易度3.2および3.6前後で増減が認められた。本学に入学した理由については、歯学科および口腔保健学科において、1位が「歯学または口腔保健学に強い興味があった」であった。2位は歯学科では、「自分の能力レベルに相応」、口腔保健学科では「専門的な資格取得のため」であった。

今回の解析で、歯学科の個別入試の難易度の平均点が、平成25年から28年度にかけて低下が認められた。今後も継続してアンケート調査を行い難易度の推移を継続して調べていく予定である。